

# 言葉の「意味」とは何か

矢沢国光（ろう・難聴教育研究会）

◇聾学校教師のための「言語学」の目的

ここで、この連載の目的を、あらためて、簡潔に示しておきます。

◎「言葉は、教えることはできない。コミュニケーションの中で育つものである」とは、聴覚障害教育の長い歴史の中で確立された経験則である。この経験則は、どのような言語学的な根拠を持っているのか。

◎「言葉の獲得」は、「意味」が先行する。赤ちゃんの「初語」も然り。幼児の言葉の獲得も然り。手話をベースとして（第二言語として）日本語を習得する場合も、然り。こうした経験的事実を総称して、最近、聴覚障害教育関係者の間で、「トップダウン方式」と呼ばれている。トップダウン方式——意味先行の言葉の獲得——は、言語のどのような性質に根拠があるのか。

◎聴覚障害児の「言語指導」には、昔から様々な方法が実践されている。発音指導、絵カードで言葉を教える、遊びの中で言葉を使う、再現遊び、絵日記、幼稚部のトピックス（話し合い）、絵本の読み聞かせ、作文、読書指導、教科指導の中での日本語指導、……。これらの指導法が、子どもの言語獲得にとって、有効かどうか。その評価は、複雑で難しい。難しい理由は、子どもの発達段階、言語能力等によって、大きく異なるからである。異なるにしても、判断の基準を、言語学が与えることができないか。

◎「言語獲得」は言葉の「形」と「意味」の結合であると述べたが、子どもにとっては、毎日毎日が、新しい「意味」との遭遇である。この、「新しい意味」がすべて「新しい言葉」と結合するわけではない。「新しい意味」のほとんどは、古い言葉でやりとりされる。子どもは「古い言葉で新しい意味を表す」のである。これが「言葉の発達」と呼ばれるものの核になっている。このことは、言語のどのような性質に基づくのであろうか。

こうした疑問は、筆者自身が、聾学校の教師として長年聴覚障害児の言葉の発達に関わってきた中で抱いた疑問です。

こうした疑問に答えられる「言語学」がほしい。このことがこの連載の目的です。

さて、これまで2回の「言語学入門」で述べてきたことは、次のようなことです。

- ・言葉は、コミュニケーションのさまざまな手段の中の一つである。
- ・言葉には、「意味」と「形」がある。この二つの対応関係は、基本的には「恣意的」であり、「写像的」関係は、ほとんどない。
- ・したがって、言葉の「形」は、それ自体では言葉の「意味」を運ばない。
- ・ところが「言葉を獲得する」とは、言葉の「形」と「意味」の結合を獲得することである。

言葉の「形」については、ずいぶんと研究が進んでいます。従来の「言語学」は、もっぱら言葉の「形」についての研究であったといってもよいでしょう。

言葉の「意味」とは、何か。「言語学」が、この問題を扱いかねてきたことは、既にみました。私たちは、従来の言語学の延長線上に「言葉の意味」を探ることは止めにして、聴覚障害児の「言葉の獲得」の実際の様子を出発点として、言葉の「意味」とは何か、「コミュニケーションで意味が伝わるとは、どういうことか」を考えたいと思います。

### 3 言葉の「意味」とは何か

#### 3-1 子どもの言語獲得と「意味」——「言葉はラベル」

筆者（矢沢）が「言葉はラベルだ」、という考え方を初めて知ったのは、米国の聴覚障害教育機関CID（ろう中央研究所）のマーチン先生の著書<sup>\*1</sup>からです。この本は、聴覚口話法を自然法的な言語獲得法として理論的に集大成したものです。

マーチン先生は、この本の中で、次のように述べています。

##### 【最初のラベル（初語）】

一つの音または音節が、子どものほしいものに対して張られたラベルのように聞こえることがよくある。パパがドアから歩いてはいつてくるとき、子どもが「ダー」という。ママが興奮して「ダディ！ダディっていったのね」と言う。ちいさな音節の「ダ」が単語「ダディ」として解釈されたのだ。子どもはプラスの強化<sup>\*2</sup>を受けて、この次にまた発声したいと思うようになる。すぐにも、ダの音節が子どもにとって「ダディ」を表す言葉となる。子どもはボールのことを「バウ」、スプーンのことを「プー」「ウォータ」のことを「ウォー」と言うかもしれぬ。親がこれを模倣して発音を磨くに連れて、子どもの発語は正しい形に近付いていく。

こうした体験は、多くの親や早期教育の教師にとって、心当たりのあることだと思います。以下は、私自身の体験です。

あるママは、赤ちゃんをおんぶするとき「ばっばするよー」と声をかけて、おんぶしていました。そのうちに、赤ちゃんは、おんぶして欲しいとき「ばっば、ばっば」と、ママに言うようになりました。

「ばっば」という特定の音声は、ママが赤ちゃんをおんぶする（赤ちゃんからすると、ママにおんぶされる）という経験（の記憶）に結びついた音声であり、そうした経験の反復の結果として、「おんぶ」という行為（の記憶）に貼り付けられた「ラベル」となったのです。「おんぶ」は、マ

---

\*1 Audrey Ann Simmons-Martin, Ed. D. および Karen Glover Rossi, M. A. 「言語発達のパートナー、両親と教師」ベル協会、1990

\*2 「強化 reinforcement」は、心理学の用語で、偶発的なある「行動」に対して特定のある「反応」が繰り返されると、その特定の反応を期待して、その「行動」が意識的になされるようになる。赤ちゃんが泣いたとき、ママが授乳すると、赤ちゃんはミルクがほしいとき泣くようになる、とか。

マと赤ちゃんの「おんぶ」という共通の体験に基づく共通の記憶に貼り付けられたラベルであり、そうしたものとして、ママと赤ちゃんとの間のコミュニケーションの手段として、例えば次のように、使用されることになったのです。

赤ちゃんが、ママに「ぱっぱ」[おんぶして]  
ママが赤ちゃんに「ぱっぱしようか？」 赤ちゃん「うん」

これは、この親子の間だけで通ずる言葉——手話で言ったらホームサイン——です。この母子以外の人には、通じません。しかし、二人という最小の集団の「言葉」であることは、たしかです。

ここに、パパが入ってきて、パパも「ぱっぱ」という言葉を使うようになります。

さらに、保育園の保育士さんも「ぱっぱ」を理解し、使用するようになるということもあり得ます。

こうして、始めは、たった二人の間だけで通じた言葉が、3人、4人と、より多くの人の間で使われるようになります。

それでも、「ぱっぱ」という言葉の流通範囲は、ごく限られたもので、一つの家族、一つの保育園という範囲です。

このように、言葉は、元々は、ごく身近な「共通体験・共通記憶」の集団の間で流通するものであり、それが次第に、流通範囲を広げていくものです。こうした言葉の「個別的状況依存的限定的な」性格は、言葉の発生の仕方（個別的状況依存的限定的なコミュニケーションの中で、共通体験・共通記憶に対する「ラベル」として生まれたという）によって、本質的に規定されているのです。

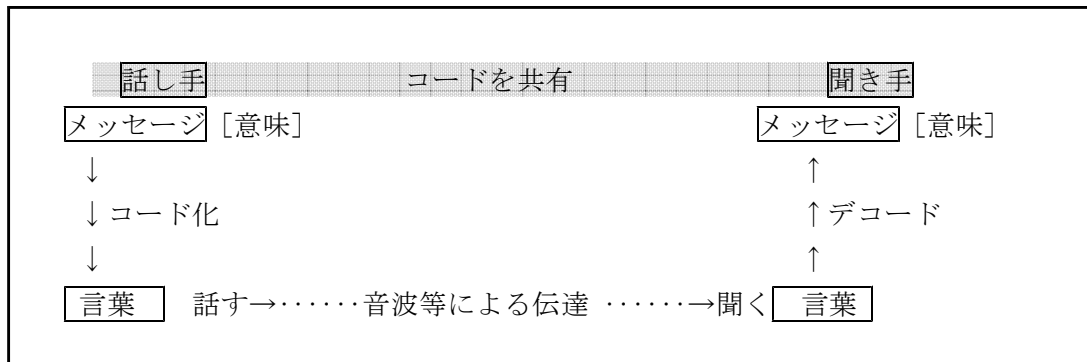
マーチン先生は、次のように述べています。「重要なのは、体験することと言葉を使って回りの人々とやり取りすることである。子どもには体験が必要であるが、体験すればこんどはそれにつけるラベルが必要となる。子どもの頭の中に浮かんだ考えこそが、言語形式を要求するのである。子どもの内部に意味が形成されなければ、語はどんどん溜め込むことができたとしても、本当の言語行動は実現しない。」

言葉の「意味」とは、もともと、このように、「頭の中に浮かんだものに付けられたラベル」であり、その人（およびその人と体験を共有した身近な人、たとえば家族）の、きわめて個人的な体験に基づく、従って状況（事態の経過、流れ、コンテクスト）に依存した意味に付けられたラベルであるとしたら、直接には体験を共有することのない、他人と他人との、言葉を用いたコミュニケーションにおいて、どうして「意味」が伝わるのでしょうか（本当に「意味」が伝わるのでしょうか）。また、「意味が伝わる」とは、どういうことでしょうか。

### 3-2 メッセージ・コードという意味伝達のモデル

「言葉による意味の伝達」の、常識的なモデルは、以下のようなものです\*1。

- 1) 話し手は、相手に伝えたい「メッセージ」を持っている。
- 2) 話し手は、その伝えたいメッセージを、言葉に換える [コード化する]。
- 3) 言葉に換える際、話し手は、話し手と聞き手の双方にとって共通のコード、つまり「意味を言葉に換えたり言葉を意味に換えたりする約束の体系」に従って、換える。
- 4) 言葉が音声や文字の形で話し手から発信され、伝達されて、聞き手に届く。
- 5) 聞き手は、言葉を受け取り、話し手が使ったのと同じコードに従って、言葉からメッセージを再現する [デコード]。
- 6) 聞き手は、再現されたメッセージを、話し手の自分宛のメッセージとして受け取る。



このように「メッセージ伝達の過程」を「整然と」説明されると、多くの人は、「なるほど」と信じてしまいます。

昔の学生は、ゲルピンになると、「30ヒゲシュクダイヒツヨウカネオクレ」といった電報を親に打ったものです。「30ヒ」は30日、「ゲシュク」は、食事付きの借間、といったことが、息子にもその親にも、共有している言葉としてある [共通の辞書を持っている] ので、息子の言いたいこと、つまりメッセージが、親にも伝わる、というわけです。

かつて、丸紅という商社から米ロッキード社に「ピーナッツ100個受け取りました」という文書 (領収書) が渡されました。ロッキード社は航空機の製造会社であり、ピーナッツを販売するわけがありません。「ピーナッツ」とは、100万円 (の賄賂)、つまりピーナッツ100個は1億円のことだったのです。部外者には何のことかわかりませんが、丸紅とロッキードの担当者の間では、共通の辞書 (コード) を持っていたのです。

\*1 マルティネ編著『言語学事典』によれば、言語学の歴史の中では、「コード-メッセージ」モデルは、言葉の社会的側面と個人的側面についての考え方の展開の一つの姿として、位置づけられる。まず、ソシュールは、言葉の個人的側面な有様を「パロール」、社会的な有様を「ラング」として、区別した。「ラング」とは何か、様々な見方があるが、「ある言語共同体の言葉の目録」(つまり、共通の辞書) という見方が、「次の「コード-メッセージ」モデルにつながる。

「コードとはメッセージを組み立てることを可能にする組織であり、これと照合することによって、メッセージの各要素の意味がわかる。」

生成文法においては、ラング-パロールの関係は、「言語能力 (コンピタンス)」と「言語運用 (パフォーマンス)」の関係へと、再編成された。

このように、「共通の辞書（コード）」を持っていれば、「メッセージを共通のコードで言葉に換えて伝える」ことは可能であり、「社会的に共通のコードを習得し、それに従ってコード化（メッセージを言葉に換える）やデコード（言葉からメッセージを読みとる）を学ぶことが言語学習である」ということに、何の問題もなさそうです。

はたして、そうでしょうか。

人と人とのコミュニケーションの具体的姿を検討してみると、そのように単純ではないことが、わかります。

問題は、大きく分けて、二つあります。

第一に、「メッセージを共通のコードによって、言葉に換える（逆に、共通のコードによって、言葉からメッセージを引き出す）」といっても、一つの社会（例えば日本語話者の社会）のすべての成員にとっての「共通の辞書」なるものが、果たしてあるのでしょうか。

第二に、仮にメッセージが共通のコードによって、「正しく」伝わったとして、「聞き手が受け取る意味」とは、「話し手が伝えようとしたメッセージ」に還元してしまってよいのでしょうか。

### 3-3 辞書とは何か？辞書の種類と歴史

例えば、小学校の教室で、教師と子どもたちが日本語で会話している、「会話が成り立っている」とき、「教師も子供も日本語という共通言語を持っているから通ずるのだ」と言われます。その場合の「日本語という共通言語」とは、何でしょうか。それは、日本語を理解・表出する能力の体系——日本語の言語能力——であり、日本語話者の脳内には、そうした能力が備わっていると考えられています。平たく言えば、日本語の「辞書と文法」です。

これまでの聴覚障害教育は、なんとなく、次のように考えてきました。社会的な規範としての「日本語」が個々人の外側に、私たちが生まれる前から厳然と存在し、それを学ぶことによって日本語で交信できるようになる。聞こえる子どもは、ほっておいても、ある程度は、日本語を獲得するが、聴覚障害児は、ほっておいたら日本語を獲得できない。だから、聴覚障害児には、社会的な約束の体系——規範——としての日本語を、一から教え込まなければならない。

そして、目に見える辞書の存在——ここ20年ほどの間に2千ページを超える大型の日本語辞典が相次いで出版され、家庭にも普及しています——が、こうした考えを、心理的にも、押しつけているようです。日本語の形と意味の組み合わせは、すでに決まっており、どんな日本語の文章でも、「辞書」に登録された「意味」を文の中の単語に挿入することによって、一意的に引き出されるように思えるのです。

しかし、聞き手が話し手の言葉から受け取る「意味」は、そのように、「共通の辞書」を介して話し手の言葉から「意味」をつかんでいるのでしょうか。

メッセージ・コード・モデルにおいて、「共通の辞書を持つ」というときの「辞書」は、もちろん、比喩的な言い方であって、目に見える形の「辞書」があるわけではありません。しかし、「共通の辞書」とは何かを考える上で「目に見える辞書」について、それは一体どのような性格を持っているのかを明らかにすることは、参考になると思います。

英国の辞書の起源は、8世紀のラテン語注解集でした。英国人（といっても一部の僧侶・学者・

教師・役人・法律家らですが) がラテン語の書物を読むとき、英語で書き込んだ注解が gloss であり、それを集めたのが glossary 注解集として出版されました。ラテン語を読解するための辞書です。<sup>\*1</sup>

英国で、初めて登場した「英語の辞書」は、17世紀の R.Cawdrey が作った『難解常用英語辞典』です。英語の辞書といっても、それはヘブライ語・ギリシャ語・ラテン語・フランス語等、一般の英国人にはなじみの薄い外来語英語の辞典でした。

日本でも、最初の辞書は、外国人のための日本語辞典でした。『日葡辞書』(1603年)、ヘボン『和英語林集成』(1867年)。

日本で近代的な国語辞典が作られたのは、大槻文彦の『言海』が最初です(1889年)。明治末以降、金澤庄三郎『辞林』(1907)、同『広辞林』(1925)等、本格的な国語辞書が相次いで刊行され、広く学校で用いられました。しかし、これらはいずれも、古典・難語・文章用語中心の辞書でした。日本語は、古来、漢語(中国語)を広く取り入れ、明治以降の日常語には、本来の和語と切り離すことができないように、混ざっていました。日本人は、日常的に、中国語という外国語を使用せざるをえなくなっていたのです。「国語辞典」と言っても、実質的には、半分は、漢語辞典でもあったのです(実際「漢和辞典」が、中学生から必携になっていました)。日本の辞書の歴史も、英国と同じように、外国語の読解のための辞書から始まり、長い間、辞書といえば、それしかなかったのです。

イギリスで英語の辞書が本格的に作られたのは、18世紀のサミュエル・ジョンソン博士の「A dictionary of the English Language (英語辞典)」です。さらに、マレーが19世紀末から20世紀初頭にかけて編纂したOED(オクスフォード英語辞典、改訂版は、全20巻2万1千ページの大著)があります。その特徴は、英国の広範囲の文学作品から膨大な用例を拾い集めて掲載していることです。

日本で、現代語中心の辞書が登場したのは、松村明『大辞林』が初めてであり、それは1988年—一つい最近のことです。

では、辞書に書かれているのは何か、ということですが、外国語を読解するための辞書でしたら、外国語に対応する(つまり翻訳する)自国語が書かれています。しかし、英国の英語辞書、日本の日本語辞書となると、そうはいきません。

初期の自国語辞書は、「言葉を別の言葉で説明する」ものでした。しかし、それには自ずと限界があります。イラストが加わったり、詳しい記述や学問的成果の要約が加わったりして、次第に「事典」または「百科事典」に近づいていきます。それは、言い換えれば「言葉自体の説明」から離れて「言葉の表す事物の説明」へと転化していったということです。

辞書が「言葉自体の説明」という本来の機能を徹底しようとして向かったのは、「用例集」です<sup>\*2</sup>。イギリスのOEDは、古典文学の世界の用例が主でしたが「用例集」の金字塔です。現代日本語の辞書は、現代語の用例集が、その中心になっています。

ちなみに、『大辞林』の「たつ」という項を引くと

---

\*1 東信行、英国の辞書『世界の辞書』

\*2 言葉の使われる「コンテクスト」を記載する試みもある。ジョンソン博士は、その『英語辞典』に、「oats: 穀物。イングランドでは、通常、馬の資料であるが、スコットランドでは、人の食用に供される」と書いたという。日本では三省堂『明解国語事典』が、この種の記述の多いことで有名である。しかし、いずれにせよ、「読み物として面白い」域を出ないのは、コンテクストの記述など、原理的に不可能ということであろう。

㊦①人がその体を垂直にする。ア座ったり横になったりしていた人が足を伸ばして自分の姿勢を垂直にする。「長いこと立っていたので、疲れた」[以下、項目番号のみ] ～カ、②、③ア～エ、④、⑤ア～オ、⑥ア～キ、⑦、⑧、㊦①～⑦と、現代語だけで26項目に分けて、用法の意味解説と用例が記載されています。[㊦は古典語]。

「目途がたつ」「役に立つ」「顔が立つ」「人目に立つ」…。

これは「言葉の意味を説明する」という辞書の本来の機能が、「言葉の用例をたくさん挙げる」という形でしか果たせない、ということを示しています。

つまり、(目に見える)「辞書」の基本的性格は、その言語集団の「言葉の用例集」である、ということなのです。

7月のろう・難聴教育研究会第28回大会の平田オリザさんの講演の中で、「ボーリングに行こう」という台詞についてのお話がありました。これは、テネシー・ウィリアムズの作品のなかに出てくる台詞ですが、この作品が日本に紹介されたのは1920年代——日本では、だれもボーリングなど見たこともやったこともない時代でした。翻訳者が辞書で調べると、「鉄のボールで遊ぶものらしい」ということは、わかった。しかし、平田さんに言わせると、ボーリングがどんな競技か知っているだけでは、「ボーリングに行こう」という台詞は、理解できない。友だちをボーリングに誘う間柄は、美術展に誘う間柄とは、ちがうのです。ボーリングに誘うというのは、どんな間柄かという「コンテキスト」がわからないと、この台詞のニュアンスは理解できず、演ずることができないと言うのです。

ところが「辞書」に書いてあるのは、ボーリングという競技の概要と、せいぜい沿革です<sup>1</sup>。

ボーリングの社会的な意味、人間関係にとっての意味——ボーリングという言葉がどのようなコンテキストで使われているか——は、辞書に書けません。これは、辞書のページ数が限られているから、書ききれない、ということではありません。原理的に、不可能なのです。ボーリングの社会的な意味、人間関係にとっての意味を記述しようとしても、ボーリング体験が人によって異なり、集団によって異なっているから、原理的に、記述しきれないのです。つまり「ボーリングとは何か」と言うことは、各人のボーリングについての体験と、体験に基づく記憶なのです。体験が異なる以上、記憶も異なるのです。「辞書」に書かれている「言葉の説明」は、各人のボーリング体験のごく一部——競技の名称といった共通の記憶——に止めるしかないのです<sup>2</sup>。

こうした言葉のコンテキストもまた、「用例」という形で、書くしかないのですが、実際には、せいぜい、OEDのように、古典文学作品からの引用という形で、例示するのが精一杯なのです。

### 3-4 「共通の辞書」があっても伝わらない

\*1 大辞林の「ボーリング」の項には、次のように書かれている。【ボーリング】直径約22センチメートルの非金属性のボールを転がし、約20メートル前方の床のうえに正三角形に並べた徳利型の10本のピンをできるだけ多く倒し合う競技。3～4世紀頃からドイツの修道院で悪魔に見立てた棍棒を倒した「ケーゲル倒し」が原型という。十柱戯。

\*2 言葉の意味とは、その言葉が使用されたコンテキストの中でのみ意味を持つ——という考えに徹して、編集された辞書が、OED (Oxford English Dictionary) です。OEDは、主として英文学においてある言葉が使用された例を、たくさん集めたものです。辞書とは言葉の用例集である、という考え方です。これが「辞書」の本質を最も正確に表していると考えられます。

日本語の話者のすべてが「共通の辞書」を持ってはいないことは、改めて説明するまでもないことです。

インターネットを検索していたら、「若者用語の小事典」を見付けました。「ポリ公：警察」は、1960年代にもあった言葉です。「きもい：気持ち悪い」は、我が家の息子も使っていました。しかし、「アレンゲ：「あれ、なんだっけ？」の略」、「ぼりくそ：とても、非常に」になると、私などには、見当も付きません。ごく身近に生活していても、世代が異なるだけで、辞書の非共通部分がとても大きいことに、驚かされます。

問題は、「共通の辞書」を持っていても、必ずしも通じない、ということです。

私には、こんな失敗の体験があります。遠くにいるBさんと、仕事の上で、メールのやりとりをしていました。ある書類が必要になり、Bさんに「ファイルを至急送ってください」とメールしました。私は、インターネットのメールがいつ送られてくるかと、待っていたのですが、二日たっても三日たっても、来ません。ようやく四日目になって届いたのは、インターネットのメールではなく、宅配便で届けられた、印刷物でした。A4の立派なファイルにとじてありました。

「ファイル」という言葉で、私がイメージしたのは、メールに添付したデータでした。ところがBさんがイメージしたのは、紙のファイルとそれにとじた印刷物だったのです。

「送る」という言葉で私がイメージしたのは、メールに添付して送信することでした。ところがBさんがイメージしたのは、宅配便で送ることでした。

私とBさんの間で、「ファイル」も「送る」も、意味が食い違っていたのです。

それでは、私とBさんが「共通の辞書」を持っていなかったか、といえ、そんなことはありません。Bさんも、「ファイル」がパソコンにあることは知っていますし、メールに添付して送ることも、日常的にやっています。

これは、「共通の辞書を持っている」ことが、必ずしも、メッセージを正確に伝えることにはならなかった例です。

では、「共通の辞書」があり、それを介して、話し手の言葉から聞き手がメッセージを「正しく」読みとったとして、それが、コミュニケーションにおける「意味の伝わり」と言うことになるのでしょうか。 (以下、次号につづく)

---

ろう学校教師のための言語学入門 (3)

### 3-5 言葉が通ずるとは？

話し手と聞き手の間に「コミュニケーションが成立する」とはどういうことか？

それに対する一つの回答として、前回、「メッセージの伝達」モデルを検討しました。そして、「共通の辞書」がたまたまあったとしても、話し手の伝えたいメッセージが、必ずしも「正しく」伝わらないことを見てきました。

その原因を考えてみると、「共通の辞書」と言っても、その実態は、各人の言語体験 (の記憶) の集積であり、相手の発した言葉を手がかりに、とっさに自分の過去の言語体験の記憶庫を検索しても、当たり外れがある、ということです。



また、「辞書」は、所詮は個人的な言語体験の集積ですから、同じ「言葉」にまつわる記憶も、個々人によって異なる——ときにはとんでもなく大きく異なる——わけです。

同じ「戦争は、いやだ」と言う「戦争」という言葉も、日本で「平和な」生活を営んでいる一人の小学生にとって「戦争」と言う言葉に結びついている記憶と、アメリカ軍の「誤爆」によっていちどに40人もの女性子供らが犠牲になった地区に住んでいるイラクの一人の小学生にとって「戦争」という言葉が結びついている記憶とでは、途方もなくちがっているでしょう。

日本人とイラク人、などという例を持ち出さなくても、同じ日本人でも、私のばあいには、「戦争」という言葉は、父親の応酬、防空壕、母子3人焼夷弾の落ちる中を逃れたこと、疎開、米軍の進駐、などの記憶と結びついています。安部晋三官房長官は、51歳といますから、終戦のときはもちろん生まれてもいません。「首相の靖国参拝」を当然視する背景には、「戦争」という言葉に結びつく記憶が、私などとは、まるきりちがうということがあるのでしょう。

「言葉が通ずる」ためには、交わされる言葉が、辞書の（原的に、もともと）個人的な性格による相違は仕方がないとして、できるだけ近い体験・似通った体験の記憶に結びついていることが必要です。

それでも、人が二人で会えば、全く同じ生い立ち、同じ生活体験、同じ言語体験と言うことは、あり得ません。ですから、同じ言葉を使っても、その言葉の意味するところは、相手と自分では、微妙に——ときには、大きく——ちがうわけです。そこから平田オリザ氏がいう「異なるコンテキストを持つ他人との対話」の能力が問われる、ということにもなるのです。

これはこれで、とても大切なことですが、じつは「同じ（または、似通った）コンテキストを持つ仲間内の会話」においても、——つまり、言葉の意味それ自体は、ほとんど共通の記憶に結びついており、その限りで、メッセージが正しく伝わるとしても——、コミュニケーションとは、たんに、話し手のメッセージの聞き手への伝達、という単純なものではないのです。このことは、ちょっと意識して日常の会話を観察してみれば、わかることです。

友人のお宅に電話したら、たまたま3歳くらいの子どもが電話に出ました。

「お父さん、いる？」と聞くと、子どもは電話の向こうから「いるよ」と答えます。そのまま待っていると、いつまで経っても、お父さんが電話に出てきません。「もしもし」と話しかけると、子どもの声が出て、子どもは、じつと私の次の言葉を待っていたのです。

「お父さんいる？」に、子どもは「いるよ」と、「正しく」答えられました。

子どもに言葉の意味が伝わったか、といえば、言葉それ自体の意味は伝わったのです。しかし、コミュニケーションとしては、話し手の意図と子ども反応は、ずれています。「お父さん、電話だよ」と呼びに行くことまでは、思いつかなかったのです。

そこで、話し手は、さらに「お父さん、呼んでね」と言います。子どもは、それを聞いて、お父さんと呼びに行きます。

こうしたことは、よくあることです。

このように、会話において、「コミュニケーションが通ずる」ことを、たんに「言葉の意味が正しく伝わった」ということではなく、「話し手の意図・働きかけに対して、正しく反応する」というように、広げて考える必要があるのです。「正しく反応する」と書きましたが、「正しく」というのも、問題があります。話し手にとって、満足のいく反応が「正しい」として、よいのか。聞き手が、話し手の意に添わない反応をすることもあれば、ずれた反応をすることもある。話し手の予期

しない反応で、かえって話し手がうれしくなる反応もある。聞き手の反応について「正しい」とか「正しくない」とか、価値判断はやめにして、むしろ、コミュニケーションにおける「話し手の働きかけ」と「聞き手の反応」によって成り立つコミュニケーションという関係がどのような特徴・性格を持っているか、それは、言葉の意味・構造・文法などどのように関わりがあるのか、スムーズなコミュニケーションとぎくしゃくしたコミュニケーションは、どこにちがいがいいのか。円滑で、社会生活が円滑に進み、個々人やひいては、社会が高められるようなコミュニケーションが実現するためには、どのような言語コミュニケーション指導が必要か。

こうした視点で、「コミュニケーションの構造」について、考えていきたい。

すでに、こうした視点で、言語について考えた研究があります。「言葉の意味づけ論」です。

## 4 言葉の意味づけ論